

多様性の受容～その困難な道のりの先にあるもの～

平成 28 年 8 月
浩志会研究会員代表幹事
工藤陽代（警察庁）

1 研究テーマ選定の背景

（1）多様性を受容する価値観の危機

近年、ISIL や AQ 関連組織を始めとするテロ組織や、これらの組織が喧伝する過激思想に影響を受けた若者らによるテロが世界各地で発生しています。過去 1 年間だけでも、パリ、カルフォルニア州サンベルナルディノ郡、ジャカルタ、ブリュッセル、オランダ、イスタンブール、ダッカ、ニースなどで、信条や生活習慣が異なるというだけで、あるいはたまたまその場に居合わせたために、多くの人が無差別に攻撃の対象とされ、尊い命を奪われています。

また、シリア情勢の悪化やリビア、ソマリア、マリ等での暴力的過激主義の浸透等を背景に、中東・アフリカ諸国等から大量の難民が欧州に押し寄せ、各国は対応に苦慮しています。

欧州においては、こうしたテロの脅威、社会における移民・難民の統合の困難・コスト負担に加え、経済の停滞、国内の格差拡大等の影響もあいまって、フランスやドイツといった域内の大国においても、移民排斥を訴える極右政党が台頭し、それぞれ国内政治上無視できないほどに勢力を拡大しています。

イギリスにおいては、本年 6 月に同国の EU 離脱の是非を問う国民投票が実施され、52%対 48%で離脱支持票が残留支持票を上回りました。今後、同国は EU との間で離脱に向けた交渉を開始することになります。このような結果となった背景について、単純に論じられる訳ではないものの、離脱支持派の原動力のひとつとして東欧からの移民増加がもたらす（と彼等が信じる）経済・社会的な不利益への不満・不安があったことが広く指摘されています。

米国では、自身が当選した際にはイスラム教徒の入国を禁止し、メキシコとの国境に移民流入阻止のための「壁」を建設する旨を公言するドナルド・トランプ氏が本年 11 月に行われる大統領選挙の共和党予備選に勝利し、7 月に同党候補に正式に指名されました。

このように、欧米諸国では、テロや暴力事件の頻発により人種・民族間の対立や国内格差の問題も先鋭化し、これまで少なくとも建前上は当然のこととして信奉されてきた民主主義、自由・平等・博愛等の価値に支えられた「多様性の受容」を社会の理想とする価値観が危機にさらされています。

(2) 今、考えるべきこと

こうした状況は、四方を海に囲まれた我が国にとって、対岸の火事といえるのでしょうか。

我が国は2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け外国人観光客の誘致活動を強化しており、昨年中の訪日外国人数は2千万人弱と5年前の2倍以上に達しています。

一方、国内で中・長期的に就労・生活する外国人の数も少しずつ増加しており、昨年12月末現在の在留外国人数は、約220万人と我が国の総人口の約1.75%を占めています。政府は今のところ単純労働力確保を目的とした移民受け入れを行っていませんが、一方で、中国やベトナムをはじめとする近隣諸国からより良い暮らしや稼ぎを求めて「留学」や「技能実習」等の在留資格で毎年多数の外国人が入国し、国内で生活を築いているのです。

我が国と欧米諸国では、地理的条件も近隣諸国との関係の背景にある歴史的経緯も異なります。しかしながら、基本的な価値観を共有する欧米諸国において今起きていることに鑑みれば、その状況にしっかり目を向けつつ、我が国において多様性を受容する社会は目指されるべきなのか、それはどうしてなのか、その困難な道のりをどのようにして進むべきなのか、その先に何があるのか、真剣に考える時期が来ていると筆者は考えます。

2 研究の進め方

(1) 多様性の定義

さて、ここまでは、枠組みとしては日本という「国」、切り口としては主に「人種」「国籍」「文化」の多様性を念頭に、研究テーマ選定の背景について述べてきました。

しかし、「多様性」という言葉は多義的です。例えば、皆さんの働く省庁・企業では、特に最近「多様性（ダイバーシティ）の確保」といえば「職場」という枠組みの中での「女性活躍推進」とほぼ同義で使用されることが多いかもしれません。これはタイムリーな議題ではありますが、ここでは、こういった狭義の「多様性（ダイバーシティ）の確保」に留まらず、様々な枠組み（コミュニティ、学校、職場、自治体、国（日本）、地域（アジア）、文化圏、経済システム・産業構造 etc.）と切り口（人種、国籍、性別、年齢、性的指向、家族関係、ライフスタイル etc.）で「多様性の受容」について思いを巡らせていただきたいと思います（ただし、活動・議論を具体化するためには、例えば中間研修会を目途にそのうちいくつかは焦点を絞ることが有効と考えられます。）。

その上で、1年間の活動の中で、少なくとも一度は「人種」「国籍」「文化」の

多様性の受容という観点から、日本という「国」がどうあるべきか(=ビジョン)及びそこに向けて我々はどう行動していくのか(=アジェンダ)に議論・活動の焦点を充てていただきたいと思います。そして、最終研修会においては、この点についてのフォーラムとしての答えを何らかの形で発表の中に含めていただくことを期待します。

(2) 個別の論点

次に、本研究テーマで活動・議論を進める上で採用し得る論点をいくつか提案します(あくまでも例示であり、これらに捉われる必要は全くありません)。

ア なぜ、何のために多様性を受容すべきなのか

そもそも、なぜ、何のために多様性を受容すべきなのでしょう。それ自体が目的なのか、それとも、それは我々が「何か」を実現するための手段、あるいは「何か」になる・「何か」であり続けるための条件なのでしょう。

本稿の標題が示唆するように、筆者は、いかにそこに困難が伴うとしても、また、仮にそれが動物的本能に逆らう行為だったとしても、人間は多様性を受容する社会を目指し努力し続けるべきであり、それ自体が目的たり得ると考えています。しかし、その根拠を問われると、「人間だから」以外の確固たる答えを未だ持ち合わせていません。

○ 多様性を受容するとどのような経済的、社会的メリットがあるのか。

○ 異なる価値観を持つ者と相互干渉で壁を隔てて生きて何が悪いのか。

こういった懐疑的な立場からの問いにも自信を持って答えられるようになりたい、それが、筆者が今回研究テーマの設定という幸運な機会を得て、「多様性の受容」を取り上げたいと思った最大の、そして極めて自分勝手な理由です。

※参考映画:「ブロークバック・マウンテン」(2005)、「ヘルプ〜心がつなぐストーリー〜」(2011)、「ファインディング・ドリー」(2016)

イ 内なる偏見・差別意識の克服

あなたは、見た目や話す言葉、生活習慣が懸け離れている人を躊躇なく受け入れることができますか? 「〇〇人だから〇〇が得意だ」、「△△系ならではの仕事ぶりだ」といった、さしたる根拠もない自説を展開したことはないでしょうか。内なる偏見や差別意識、もう少し柔らかい言葉を使えば固定観念を克服するには困難を伴います。どうしたら、最初の一步を踏み出すことができるのでしょうか。

※参考映画:「ズートピア」(2016)

ウ NYMBY(Not In My Back Yard)思考の回避

我が国には、産業集積地などを中心に、多くの在留外国人コミュニティが点

在していますが、どのような経緯でこれらのコミュニティが形成され、これまでどのような問題が発生し、克服されていったのか、あるいはされていないのか、地域住民以外はほとんど知らないのではないのでしょうか。他方で、こうしたコミュニティで暮らす在留外国人が、我が国の農業や製造業の一端を支えているという現実があります。

自分の目の前（「裏庭」）で起きていること以外には、例えそれが自分の生活の利便性に直結していることだったとしても関心を持ってない、それはNYMBY(Not In My Back Yard)思考に陥る第一歩ではないのでしょうか。こうした思考回路からひとりひとりが脱却することなしに、多様性を受容する社会を形成することはとても困難だと考えます。

※参考映画：「グラン・トリノ」（2008）、「第9地区」（2009）

エ 我々世代が変える、次世代に繋げる

我々世代は、何を、どのように変えるべきなのでしょう（あるいは、変える必要はないのでしょうか）。また、それをどのように次世代に伝えていくべきなのでしょう。

「自分とは異なる他者」に対する考え方や付き合い方は、良きにつけ悪しきにつけ、家庭や地域等、様々な教育の場を通じて世代から世代へと受け継がれていく側面が強いように思われます。したがって、「我々」がどうするかを考える時には、必然的に「次世代」への責任を考慮しなければなりません。

※参考映画：「キングスマン」（2014）

オ 紐帯を見出す

多様性を受容する社会の実現・維持のためには、そこで暮らす多様な人々の間に、一方で何らかの共通項、紐帯が見出されている必要があると考えます。

例えば、「人種」「国籍」「文化」の多様性の受容という観点から日本という「国」がどうあるべきかを考えることは、何が「日本」を「日本」たらしめているのかを考えることと表裏の関係にあります。「日本的」、「日本人的」という言葉はとても安易に使用されているように感じますが、一体その正体は何なのでしょう。そこに、敢えて保護主義的な対策を取ってでも守るべきものはあるのでしょうか。それとも、共通項、紐帯として残すべき価値のあるものは、多様性の波に洗われても自然と生き残っていくのでしょうか。

※参考映画：「フィラデルフィア」（1993）、「ミルク」（2008）、「シン・ゴジラ」（2016）

（3）アウトプット

最終研修会においては、（1）で触れたように、「人種」「国籍」「文化」の多様性の受容という観点から日本という「国」がどうあるべきか（＝ビジョン）及びそこに向けて我々はどう行動していくのか（＝アジェンダ）の提案を含め、それ

までの活動の集大成を他の研究会員と共有して下さい。

3 より充実した活動のために

(1) 本音をぶつけ合う

仕事上の立場や年次から解放され、それぞれが一個人として参加できることが、浩志会の醍醐味です。また、このような素の個人個人が本音をぶつけ合うことで、価値あるものが生み出されるという知恵も、浩志会に代々受け継がれてきました。人によっては案外難しいこの「本音のぶつけ合い」が積み重ねられる中で、いつかブレイクスルーが起こり、当初想像もしていなかった果実が得られることを期待しています。

(2) 地に足のついた議論

一方で、「会議室」で議論を行っているだけでは、机上の空論に終始してしまうおそれがありますし、何よりもやっけておもしろくありません。自分の目で見て、感じ、知ったことに根差した意見が説得力を持つのは論を待たないところです。ぜひ、思いつくままに、そして研究テーマとの関連に過度にこだわらず、「現場」に出かけ、人と話し、知見を深め、そこで考え、感じたことを定例会等の場にフィードバックしていくことで、議論・活動の質を高めていただきたいと思います。

(3) 「天下国家」を論じる

(2) と矛盾するように感じるかもしれませんが、「自分ができる（できそうな）こと」は何かというところから発想を積み上げるだけではなく、「我々が目指すべき国、社会はどのような姿をしているのか」ということについて議論をし尽くした上で、そこに至る現実的な道のりについて知恵を絞るのも、浩志会という貴重な場を与えられた我々の責務だと考えます。せっかくの、素の個人として自由に発言できる場です。この機会を存分に利用して、心赴くままに「天下国家」を論じてみましょう。

(4) フォーラム、世代を超えて

昨年度の研究会員の活動を振り返ると、「タテ・ヨコ・ナナメの関係」をキーワードに、それまでも少しずつ広がりを見せていたフォーラム及び世代の垣根を越えた活動が、一気に拡充した年であったように思います。

このように枠に捉われずに活動することは、思考の柔軟体操、資源の有効活用といった観点から極めて有効だと考えます。本年度もこの流れを受け継ぎ、数年

前から恒例となった定例会での本会員との交流を実施するのはもちろんのこと、フォーラム横断・世代縦断イベントやフィールドワークを皆さんと協力してどんどん仕掛けていけたらと思っております。

(5) おわりに

さて、ここまでいろいろと述べてきましたが、我々が活動を行うに当たって最も留意すべきことは、ルールや前例を気にすることなく、何を目的に、どのような活動を行い、何を成果として残すのか、試行錯誤の中で自ら探り当て、責任を持って選択することだと考えます。その苦しく楽しいプロセスを共に経験する中で、恐らく1年後には、かけがえのない仲間ができていくことでしょう。その一員となれることを、とても幸運に思っております。

151名全員で、今年ならではの研究会員活動を作り上げて行きましょう！

(本稿における意見・考え方は、筆者の個人的見解であり、浩志会及び筆者の所属組織とは無関係です。)